近聞襍録

完

862
3
116

取扱注意
帙入

国立国会図書館　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116

ガラス使用

八六二一一二六

近聞雜録

篁墩野史吉漢官著

白石先生新安手簡の一條の説に清朝康熙年の頃元朝乃子孫西韃靼にて夥しきことのに成居られ康熙帝より歳幣の料に銅三千斤を送らば本朝よりも交易して去る度の銅ハ此為なりといへり今案するに これ長崎へ来る唐舶乃商長等ゟ口傳を載られ居るなり其實ハさるものハなくしてく本朝より渡さるに銅ハこなく錢幣を鑄らるゝ為の用なるも彼舶人等我本國の錢幣を全く

高木家藏
松門文庫所藏
置讀清祕
多來關東北 勝城鈴木氏 收藏圖書印
國立圖書館 昭 23. 3. 19 和 購入
国立国会図書館 タイトル『近聞雑録』 請求記号 862-116
ガラス使用

本朝の銅を須て成ることを諱て托言してかくハ
えひしなる屈し元朝の後西韃靼にて亡し
るハ清の太宗の時にあり清の太宗ハ太祖より二代目なり
太祖名哈赤とゆき明萬曆の末に
僅百五十人にて軍を起し鳳凰山に旗を立撫順城を乘取次第に
勢振しハ明朝より討手楊鎬劉綎杜松李如栢等を大將として
數萬乃軍兵を向けありしハ皆一戰に打負劉綎杜松ハ討
死し楊鎬李如栢等ハ逃ゆり獄に下されて死きるかくなり
果て遼東城にて攻取まて天啟五年に太祖哈赤ハ死せし
なり是ハの軍ニなく西韃靼の蒙古の兵を加勢にたのみ軍
せしなり所謂元の末裔なりしハ二代目
太宗の時に元乃裔孫國を失ひしハ下に見ゆ王士禎ハ居
易録に云察兒罕國元之嫡派也世雄西北諸部
傳至靈丹可汗在位久忽欲往西域歸佛教其台
吉那顏等苦諫不聽國中無主太宗皇帝因發兵

追降之其尚璽近侍以傳國璽倉卒坎地而霾之
兵既退有童豎牧羊其地一羊屢至坎所蹄之不
已驅之復來牧覺有異試發土則璽見焉聞於官
遂進上時天聰某年也今藏御府と見へたりこれ
康熙の時元の裔國を失ひて既に久したとへ
ゑ遺孽ありとも清朝と抗して歲幣を受るに
至らし又池北偶談幸魯盛典乾隆文集をましへ
考るに西北の部落に叛者あり名を噶爾丹といふて兵を
用ひ康熙雍正乾隆三代を歷て餘類にて蕩平
し西方盡く版圖に入れ地を拓くこと二萬里に

国立国会図書館　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116
ガラス使用

あまり乾隆御製集にかけて元裔の事歳幣の
ことあるし彼國の錢幣　本朝の銅をこちて
鑄らることハ居易録存硯樓集沈德潛文集に載
せり今次第に出して考に備ふ居易録云近自
洋銅不至（洋銅とハ日本の銅なり日本をまへて東洋と
いふ日本銅を洋銅といひ日本扇を洋扇といふ
日本の夏菊を洋菊とよふ）各布政司皆停鼓鑄錢日益貴銀日
益賤今歳屢経條奏九卿雜議究無良策即毎銀
一兩抵錢一千之令戸部再三申飭亦不能行官
民皆病と見えたりこれ　本朝乃銅をしてハ
鑄錢することあたはれ錢日に乏して踴貴し銀

價低くして両貨の價お敵せず此王士禎ハ康熙
の人なれハ洋銅不至といひしハ　昭廟の此時なれ銅を
縮減せられし時の事なるへしされハ全く　本朝の
銅を以て國幣乃本とする事ハ尤以て國の機
密なれハ我邦にて問ふにかく事を構へて答へ
ゐるなり然らまんハ西韃に歳幣を送るハ国恥なり
なと忌と隠さるへき國恥に托せん我　邦の人信
して其内實を知らしめさる謀にしてかゝて彼國辨
銅の長官等ら商人に言教へ置ゐるなるへし近来我
邦乃産銅漸く饒ならさるによりて次第に縮減

国立国会図書館　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116
ガラス使用

せらるゝぬまハ彼國も殊に錢幣の源に窮ましとそ
見えし沈德潛集范毓馥碑に云乾隆三年八月
疊奉辨銅之命而辨銅之役故難銅産倭地開采
歳久其源漸乏倭以銅少居奇狡獪百出又海舶
出沒風濤中率兩歳始返而西安保定湖北江西
江蘇五省分運鼓鑄須銅甚急公既老之年力承
茲役冀上勿負朝廷之恩下勿滋子孫之累心力
交疲病致不起とみえたり二書のいふ所によれは
清國凡そ右省の鑄局ニなく和銅を以て其用に給ま
宜なり我　邦乃銅縮減せらるゝぬまハ乾隆の初京

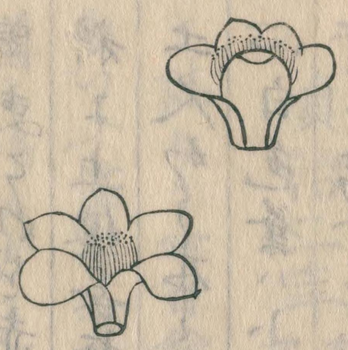
師錢貴くして康熙帝の造りたまへる銅字乃
活版をだに消爍して錢に鑄たりと乾隆帝の作
文にも見えたれは其窮蹙思計るへしまた世人の
説に唐商和銅を持還りて煎煉して黄金白銀
を搾取するといえりいはれなき妄言なり既に
居易録に銀低くして錢貴しと見えたり何そ工力
錢費して分抄の黄白を煉取せんや況や當時清
國黄金を貨幣とせされハそとより貴重すへきと
いえともたゞ服玩の用のみなれハ器飾不急の黄金
國用貨幣の銅と交易するこハ望む所なれは寶

暦の中頃より彼國の金銀を募られしに交趾雲南西蔵の足色の生金銀を數千斤載来りて銅を交易せり又是よりさき　本邦の金幣を倭金といふて持来り銅に替る事幾年なり但我國の金幣はいづくの地いかなる所よりか漏れて彼國へハ往ゆん未審しきなりかくのごとくなれハ金銀ハ不急なるを以て賤く銅ハ國家必用の急なるを以て貴ふ所とはまへて上にいふし和銅をもて鑄錢の用本とする事今に存りて諸書の載せ所顯然たりされ其白石氏のはまてハいまて其書多も渡り来らされ達識の人といえども口傳の説にのみ授られる事

誤しなる歟し

常藩府邸の後樂園に一樹あり皮滑にして極て赤色紫荊樹（百日紅）紫微花也宋の陸務觀か老學菴筆記僧行持か詩に紫荊樹と作れり今是に持る花史花鏡等に紫荊樹と云ハ今の蘇枋（すはう）花なり に似て聳直なり葉ハ櫸（けやき）又ハ榆（にれ）に似たり

五月の初に花を著く圖如左



白瓣黄蕋

其後考るにこれハ藝苑にいふ沙羅雙樹といふものゝ小花なれものゝ見ゆ此種にて花小大小なりとも

園吏これを赤栴檀樹といふ中村國香ハ房總志料ニ上總長柄郡大山寺の石階ハ下ニ一樹あり土人かう木とよふ樹皮滑にして紫微花ニ似て中心白色葉ハ小槲樹ニ類す四季ニ花を著け黑實を結ぶ花形ハ聞漏ありといふもの是樹とよく相似たり一本ありや否猶考へし

武藏府中乃高安寺ニ足利直義の寄られたる袈裟一頂あり裏ニ寄附の趣住僧の名并ニ名衙(ガン)花(カキ)押(ハン)なるを從三位源直義とあるを直義ハ三位ニ叙せられたる事未考余嚮ニ一觀せしハ忽略全文を寫すニ及ばれ他日全寫して記附へし 押字ハ花押藪ニ載たると同しと見ゆ猶可考

淺草寺觀音院の東門の側茶肆の後より地を掘るに古石幢を出せり寛政四年正月の末のゑ也門人山田直詩其碑を乞得來て視す幢面ニ光明真言を梵書まて記し中一行ニ

貞治二年乙巳八月時正 禪智 禪尼 逆咒

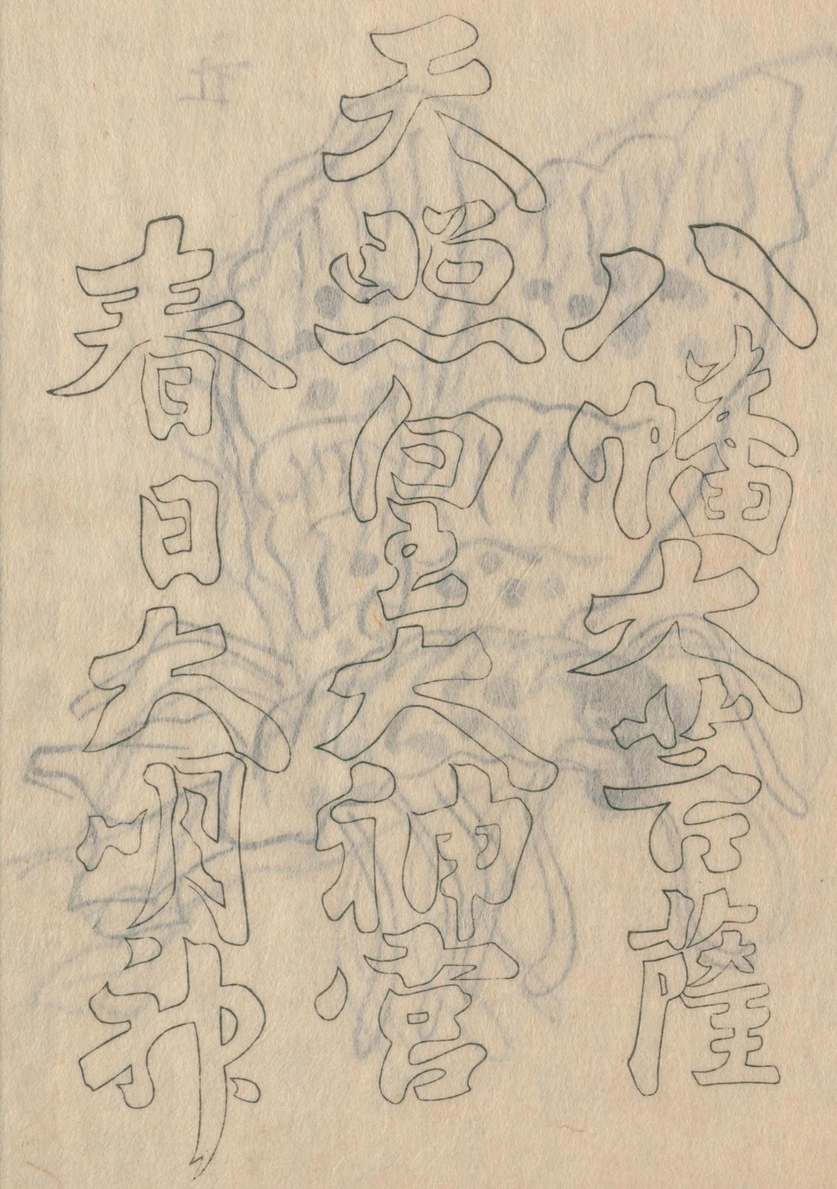
と誌せり四百餘年のものあり時正ハ春秋の彼岸をいふ佛書ニ出ありといふ徒然草にも見ゆ逆を逆ニ作る古き字體なり歐陽率更の皇甫府君

国立国会図書館　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116
ガラス使用

碑にもありさて光明真言を生ぶのにあらかしめ
唱しゆへ逆咒といふなれ今の俗壽蔵を営むを
逆修といふ其頃ハかくも書ける也未審
志摩國五智村居民某家蔵平家赤旗長サ一丈餘
幅一尺弐寸餘地練絹（ネリキヌ）繒に作る に朱を以て染其色今
においてぬ燃三神の文字おぬきの白。蝶は墨
繪にて羽の中隈とりあり寛政辛亥の秋　幕府の
台覧に備ふといふ其圖如左　右亀田興鵬居
よりうつし来

八幡大菩薩
天照皇大神宮
春日大明神

蝶　蝶



国立国会図書館　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116
ガラス使用

上

下

国立国会図書館　タイトル『近聞雜録』　請求記号 862-116

ガラス使用

枇蘭樹（ヒラン シユ）といふもの伊豆の國熱海伊豆權現乃祠中ニ大樹ありと故友山岡氏俊明新井貞堅加多りき江戸の藝圃にあるものとハ異なりといふ東都染井乃地藤堂家の別墅にも一樹なり數年前其木枯失せり其孫枝を得多ふ人三十餘年を經て今茲寛政四年四月初めて花を著たり其族門人石塚公簡一枝を携へ示す下に圖す公簡云枇蘭樹藝圃より盆に植せる小樹なりしを真種にあらず野州二荒山より出たる種にてこれを日光枇蘭樹とも

いふと熱海の樹も近来風に吹倒されて今ハなしと其東都乃地方にてハ染井の孫枝多く一樹のみなりといふ

佛經に毘羅樹又ハ毘蘭樹又ハ毘嵐にも作る譯して大沙羅樹といふと屋代弘賢いえり

国立国会図書館　タイトル『近聞雜録』　請求記号 862-116
ガラス使用

壹貳參肆伍陸漆捌玖拾の字參を叁にも作る宋
版の書には登にも作る甲州にある宋の淳熙の銅
錞乃銘にも登の字に作る徂徠集に見ゆ漆を柒に
も作る拇この十字明の初め開濟ゟ作しいて傳ゑ
とも宋の三山志に載されたる宋朝より已來ある字
なること書影に見ゆ今案るに宋朝なる始るにも
あらず唐張參ゟ五經文字に此字を用ひられハ
唐朝既ゟ志うる猶夫より前にもあらんを
猶考ゆるし
龍眼樹ハ大隅國にあり中國にそも閩廣にあれ

国立国会図書館　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116
ガラス使用

ものゆへ暖地に生するものなれども先年信州
松本の山中に一大樹あり実を著すこと夥し
初めハ村童此食に充しか後領主乃聽に達し
龍眼果たるを知り人役をして其樹を護せしむ
人徒等其役を厭ひ竊に鹽水を其根に灑ひて
遂に枯死せしむといへ越後國生瀉此一寺にも
一樹あり生来二十餘年を經て始て十餘顆を
著たりと余ゝ族人の年老たりき今ハ猶高大にも
ありぬ歟しさあれはいつれの地にても生ひ付
ぬれども実を著ぬことゆまへて寒を畏るゝ木も

皆はしめ小樹のうちのことなり長大に成ぬれは
其性既に狃れ且堅剛にして寒に堪る事常
のことなり蜀乃成都に木槿一株あり石上に
生ず疥癬を治る事妙なり所謂川槿の真種
なり人其皮を求るもの多きを厭ひて縣令某
熱湯を根に澆ひて枯せしむといへ王士禎ゝ隴
蜀餘聞に記せり信乃龍眼樹と同日の談なり又
今の人龍眼核を種ゆるものを見るに多く枇杷を
生す南橘北枳の類とみゆ豆州三島驛の
寺に一株あり葉槲に似て光澤長大なりいまに

国立国会図書館　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116
ガラス使用

實を著す信州松本のものハ葉木穗子に似て
厚かりしといふ大隅の産のものハ木穗子の葉に
似たりといふ

左傳隱公三年の杜注に忿公知而故問責窮辭と
あるを陸貞山ゟ左傳附注傅遜ゟ辨誤等に少へぬ
注也といふハこゝな讀やうあしきゆへなり忿公知(ヒトモ)
而故問責(コトサフニ)窮辭(スカト)といふ事一段よく少ゆ窮辭ハ
孟子の字なり

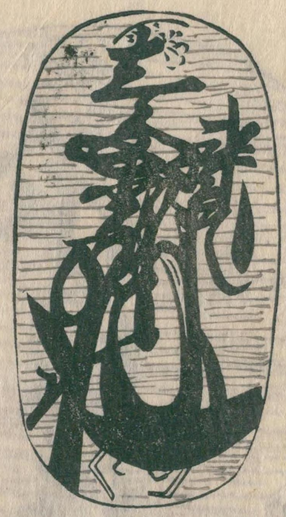
左傳六順六逆の事管子にも見ゆ左傳へ書入考
合すべし

古金幣の圖 人あり此圖をおくるさゝに出す

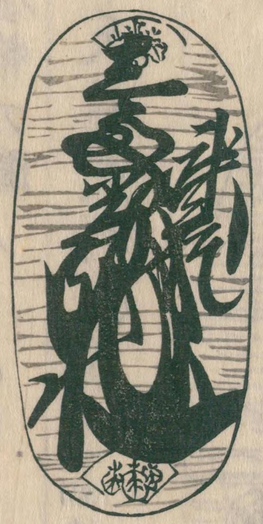
天正大判金 重四十四匁七分

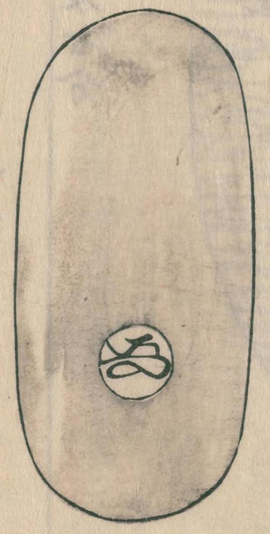
国立国会図書館 タイトル『近聞雑録』 請求記号 862-116
ガラス使用

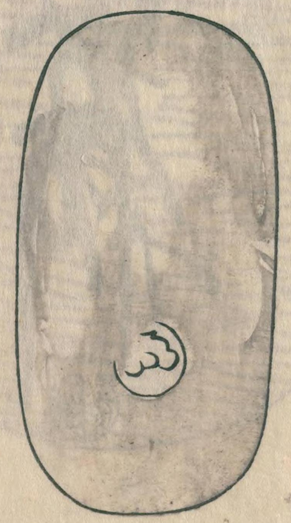
武蔵小判金　重四匁七分六厘



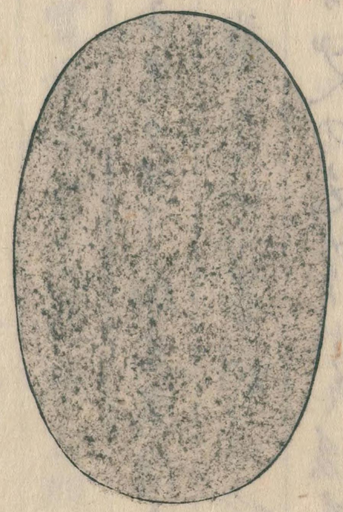
同上



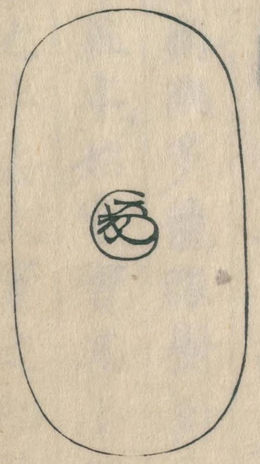




駿河小判金　重四匁七分六厘



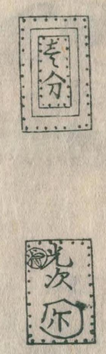
徳乗小判金　重四匁五分



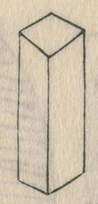
国立国会図書館　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116

ガラス使用

同上壹分判金



往古掉金切遺ニ用切端の圖



右青木敦書の金銀圖譜に志るせしや其異同考ふ所ありしかれ附載するのミ墨判といふ

錢量押字等を墨書するゆへの名なりとそ後藤庄三郎ヵ家の詞なるとし

寛政四年五月十九日躋壽館物品の會集に余ひらん樹の枝を乞て携へ出す醫官福井某云京師の方言にくわくまといふ醍醐寺ヲ一樹あるのミなるといふ

同日に大隅の産なるとして曾煥卿余に龍眼二顆を於くに華産に比すれ実小ふりにて殻稍厚く皺紋少しなり是自然生のゆへなりへし周亮工ヵ閩小紀に云閩會二十里東南隅多龍眼樹樹三接者為頂圓核之初種經十五年始實實甚小俗呼為胡椒眼覓善接者鋸木之半去大實之幼枝接

国立国会図書館　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116
ガラス使用

之至四五年又鋸其半接如前若此者三數次其實滿溢倍于常種若一二接即止者形小味薄不足尚也三接者曰針樹未接名野箸といふと見ゆ

按ずるに薩州より龍眼を献上せしを寛明日記にしるゆ其比よりのゆゑなり

寒蘭とて冬末春初に花を著る蘭あり種琉球より来るといふ花に青紫の二色あり葉常種より狹細なるを又蜂葉といふもあるを是まゝ冬に至り花さく是も琉種なりと二品片山誠之盆栽して賞す大坂の花肆にて購ひきりといふ

薄種の蛇牀子ハやぶぜりといふ草の実なり今道傍にやぶしらみといふ草の実にてあらず是ハ鶴蝨と一類二種なり鶴蝨もやぶにんじんといふ草の実なり此鶴蝨ハ藥性纂要に出たり天名精の実にてあらずに二草ともに林下の卑溼の地に多くあるものなるを

左氏莊三十三年神降于莘以其物享焉杜元凱注據月令甲乙日祭先脾玉用蒼服上青案甲乙於時爲春其色青故用蒼玉青服據素問及五行大義肝属春其色青自當用肝而今却用脾與素問不同意脾肝附近而體用亦相同故可互相通戴元禮證治要訣飲食入咽而先入肝亦此意

国立国会図書館　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116
ガラス使用

封建の字ハ左傳僖二十四年ニ見テ居ルヨリ
者の字連下讀の字法多し和訓ニこれをていまだ
と讀む連上讀にならぬゆゑに讀しめ多るなり
經傳の中ニ連下讀の者の字此心にてよむ事し
後漢書蔡邕傳ニ邕董卓ヶ名ニ應きさりしを
忿ヨリて我力能族人蔡邕終偃蹇者不旋踵矣と
いゝしていまたさよくそこゆるなり余向ニ東佐
隅東氏にかゝりしによく肯ひたりき又左傳僖二十
三年所不與舅氏同心者有如白水とこれもてい
まだとよくてよし孔左僖二十五年疏たゞ上讀

下讀とさかり有陸同
古文孝經應感章ニ父母を天地ニ比し長幼を上
下ニ比して明王の教としぬへるといふ故雖天
子必有尊也句これ總論にて上の明王をうけ
結義にて下の句乃發端なり言有父也必有先
也句言有兄也必有長也句これにて明なり今
人讀法あしく衍句あるゆゑにしふなり注意を
もとより其通にてよし又有尊一句上の天地のみにも
いふ事なれども上の說にて孔傳ニ恨ひてよし史記
淮南厲王傳ニ為劉氏祭酒應劭注禮飲酒必祭

国立国会図書館　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116
ガラス使用

示有先也故稱祭酒尊也これも先の字宗廟を
見まり孝經に本つきまり孔傳と同意なり先の
字祖先の先なり孔傳應說を通なりこれをよみ
たゞへて先の字を兄へかけてみるゆへ下乃四字
剩まゝこゝゆるなり兄に先といえるゝ俗習により
てとり遠より又上に天地に父母事と見えたれハ
有尊也の一句總論まして父母天地とかけてとる
て見えくよし

日光山にて三社權現といふハ　東照宮并天海
僧正摩多羅神なり摩多羅神ハ藤堂高虎を

祭るといふ

武州葛飾郡の村里にて夏月艾草忍冬蓼乃
三種をとりて等分にして水煮して茶可
かへて服す味甘涼にして極めてよし且濕を
去り暑を消し腹を調ふ予多摩郡可教
授せし時これを門人岡正禮に教て其奴僕
にに服せしむ夏月種秧の頃五月雨降つゞきて
田切畢るころ多く瘧疾を病むこれを服すれハ
その患ひなし三種とも生にてとりて直可
煮すべし

国立国会図書館　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116
ガラス使用

右銅屏一座藤堂和泉侯染井の茶莊なりあるを
姥茶屋といふ偶人乃老姥の像を置ける茶屋の
前の芝野乃こちらにおく其先侯高虎文祿の
役に朝鮮國より俘來するものといふ
竹棚百貨肆の圖棚上り綵縵をかけ異禽を籠
に入れてかけ連ね其あいたくに假面采帛書
卷筆墨火珠葫蘆文貝茶卓靴韈の類まで器
玩幾百種といふことなし次籠に牡丹荼蘼を
挿るを掛る金碧精巧妙入毫毛の畫跡なり
上野大慈院の藏なりと予裝工此舖にて一

国立国会図書館　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116
ガラス使用

觀せ

奥州會津領のうちに大鹽村といふ處あり山間の川邊に爺が井姥が井といふ二ツの井あり其井水を沙すれば焼く塩となれば其鹽潔白にしく粗く味よし二井爺が井ハやゝ淡く姥が井ハ濃なり長左衛門といふ百姓其井乃主なり其家ハ祖の爲に僧空海兒書しをあたへといふいふこれ空海の像と并爺姥が二像ありこれ五右軍帖にいふる蜀の鹽井なり大塩村を上れをひきて浮とそふ所に出といふ

伊賀國屏風山ハ絶頂屏風岩といふあり其上に寒蘭を生す先年大坂の花肆尋ね來るとく掘得たりといふ其所の名主にさしたりとて石冢敬話せ又伊賀山中に一草あり我に入ぬれば金色の光を生せこれも花肆に得らると同人の話なり

跋

不朽者。不啻人有之。物亦有之。周鼎商彝。古矣。其埋沒而在奥隖者。若百年。若千年。竟不得不幷華堂甲乙之帳矣。亦豈瑰奇之物。自有造物之呵護邪。非邪。篁墩先生。首唱考据之學。以率後進。旁以鑒識博通稱。距今數十年。其人既騎箕尾。而今稱好事者流。蓋由先生早啟步徑而進焉。夫然後物之瑰古者漸然而出。無復寶氣之衝斗牛矣。先生能疏物之蔚滯。俾之不朽。則似後世宜一一辨香以祝先生爲。雖然武帝帳中多薄偽者。宣和御府真

国立国会図書館　タイトル『近聞雜録』　請求記号 862-116
ガラス使用

贋襍糅乃是匱董姦佻亦由先生之學之行而進焉是先生祀典所以不免駁議也第如其所著書可以傳世而頃其近聞寓筆刻方成因披讀之異聞錯出記載詳雅所謂滿目珠璣配之宋元諸家隨筆似不甚遜嗟寸士也哉夫先生死既數十年而此書始出蓋先生昔能使物不朽而今天使人能不朽其書好還之理固然也余喜此書之行因錄所曾臆以爲跋文政丙戌龍華會前一日

它山處士公愷書於稚松街之老柳深處

近聞寓筆跋

夫循誦習傳之輩貪多務得巨細不捐研尋兀兀以夜繼晷一聞先進之士有陶練名實勒成一家言者追慕之餘歆挹風猷輒俛焉而歎所憾不獲生與之同其時世聽其緒言覩其品行而先進之士神韻所存幸有遺編傳於世僅得一書披諸几案之上恰若晤言一室輸寫欵誠而後百歲之下其扶持特立之功鼓舞作興之術可得而知也耳豈啻百歲千萬歲之下亦復爾爾意者昇平二百有餘年奎壁宣化蘊隆欝積人文之盛豈無有嫌美於先進之士者哉豈

国立国会図書館　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116
ガラス使用

又無有逸邁之士乘時挺生能創古人所未曾有者哉而彼輕脫粗豪之人以為今人也概而忽焉此其人縱使生與之同其時世聽其緒言覩其品行冥頑無知漠然不相省以終身焉已矣嗚乎識人之難自昔然矣篁墩先生名漢官字學儒一字學生篁墩其號其先常陸人家世業醫至篁墩始為儒左袒漢魏傳注首唱考據學於安永天明之間平生好合古鈔數本比對校勘四子六經聞人之儲藏古書百方求之必手自寫鈔故其所考定諸書尤究精覈然其資性敦行沈默不竟固無意於當世僻處窮巷以終身

焉故當世之人視以為今人知其識見者甚稀矣其所著述總若干種特論語集解攷異經籍考二書考證明徵持論詳密蓋我邦人所未曾有而皆為有識者所稱近世之人爭搜索珍編奇冊知崇奉唐宋古鈔影本者實篁墩為之嚆矢云頃書肆慶元堂刻近聞寓筆四卷近聳襍錄一卷余得讀之其所載多經史肯綮及士林逸事其寓筆簡而核其用意雋而永撰輯宏博品隲相當其大者實有裨於經義又有功於名教其小者足以闡發後學之才鋒參綜藝園之談柄篁墩歿後三十年于今其遺編孤行于世人竟

862
3
116

10608

購求之。僅讀一書。則蹶角稽首乎其學術之富贍。與識見之明暢。古人有謂曰。馬遷生而史記未振。揚雄歿而法言大興。誠哉夫後之視今。猶今之視古也。自今以往。冥頑無知。不相省將終身者。一讀斯書。不憾不獲生與之同其時世。加旃明瞭粤稽晰辨較詳。以備一代人文之盛。則知其首唱考據之功。不可為泯泯也哉。文政九丰丙戌之馨夏。

信濃東條耕子蔵撰

文政六癸未八月官許

吉田坦蔵梓著

浅草新寺町
和泉屋庄次郎

横山町三丁目
和泉屋金右衛門

東都書林

国立国会図書館　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『近聞雑録』　請求記号 862-116

ガラス使用